

Covid-19 肺炎と呼吸困難について-挿管例 46 例での検討

山本晴香 村山恒峻 野溝岳 深田寛子 中村保清 北英夫

高槻赤十字病院 呼吸器科

【背景】 COVID-19 肺炎においては、重症例においても呼吸困難を訴えない患者が存在する事を経験する。

【方法】 当院(中等症対応)に 2020.8-2021.9 (第 2 波~7 波) に入院し気管内挿管となった COVID-19 患者を対象に電子カルテから後方視的研究を実施した。挿管直前の安静時呼吸困難の有無により 2 群 (呼吸困難あり : D 群、なし : ND 群) に分け、比較検討した。

【結果】 46 例 (M/F 37/9, Age 66.9 ± 12.5) ND 群 23 例 D 群 23 例であった。臨床指標 (年齢、性別、BMI、嗅覚障害の有無、生化学的検査値、併存疾患, etc) に差はなかった。PaCO₂(mmHg) は同程度 (ND vs D, 35.9 ± 4.1 vs 33.5 ± 5.6 , $p < 0.02$) であったが、呼吸数 (bpm) は ND 群で少なかった (21.9 ± 3.4 vs 27.1 ± 8.3 , $p < 0.05$)。D-dimer について ND 群が有意に高値であった (D-dimer > 1.0 であるのは ND 群において 21/22 例、D 群において 17/22 例 ($p < 0.01$))。画像所見においても特に両群間で差を認めず、呼吸困難の有無による予後の差は認めなかった ($n=40$)。

【結論】 COVID-19 患者では挿管直前でも半数は安静時呼吸困難を訴えなかった。ND 群で凝固系の活性化が示唆されたが、血管内皮障害による microemboli によるガス交換障害によりコンプライアンスの低下を伴わずに低酸素血症が悪化したため、呼吸困難との乖離を認めた可能性が示唆された (L 型) もの、CT 画像ではその傾向を認めなかった。肺炎の重症度と呼吸困難が乖離している症例も多く感覚受容面も含めた更なる検討が必要である。